

春の昼に母が死んだ。

自分の画集の《不忍池の冬》のページを開いたまま、心筋梗塞で倒れていた。

病院の霊安室はゴッホの自画像の寒色だった。

父と弟は涙していた。

描くときのためのマルカワのフーセンガムのオレンジの味が異様に薄かった。

不味かった。

通夜が終わった。

告別式の棺には母の好きだった、昔描いた《不忍池 遠景》を入れた。

骨壺が重かった。

次の日、不忍池の蓮を描き直すために桃色のチューブを強く押し出した瞬間に。

描けない。

描かなくては。

いい曲線も点もキャンバスに乗せることができない。

その日は不忍池からすぐに逃げた。

次の日に上野の森美術館のMOMA展はいつものようにゆったりと見ることはできなかった。

出ですぐに下谷神社・寛永寺・上野東照宮に賽銭をぶち込み祈った。

帰りに西洋美術館の《カレールの市民》をデッサンした。

線が死んでいた。

帰りの常磐線のドアに写った顔が般若面と小尉面を混ぜたようだった。

その夜は自分の指を一本ずつ自分自身で折る夢を見た。左手の小指から順番に、絵筆を使う時に使う指が最後だった。

最後に人差し指を折ったときに飛び起きた。

本当に折れていればよかった。

次の日は本当に何もなかった。

次の日もデッサンをしたが何もなかったのと同じだった。

その次の日も油絵を描いたが何もなかったのと同じだった。

そのまた次の日も油絵を描いたがなにもなかったのと同じだった。

母の四十九日まで何もなかったのと同じだった。四十九日の次の日、自分の画集を改めて読んだ。

「不忍池」のページによくあるようによくあるような遺書があった。

「これを読んでいるということは私は死んでしまっているのでしょうか。」

特にあなたは悲しむでしょうからこれを書いています。あなたは幼稚園のときから私のためによく絵を描いてくれましたね。

小学生から賞に応募してあなたは画家を目指しましたね。

だからお父さんがお金と将来を心配したけれど、美術大に受験することに私たちは賭けました。

だからあなたにしてあげたことが身を結んだ気がして芸術院賞を最年少で取ったことが人生で一番嬉しい瞬間でした。

あなたは本当に私の人生の誇りです。

でもあなたは誰か人のために描いていますね。

だから私が死んだら描けなくなるかもしれないわね。そういうときは自分のために描いてみていいんじゃないかしら。

「頑張つてね。」

《不忍池 習作》の上に涙が落ちていた。
今まで見た自分の好きな不忍池の美しい部分が紙に現
われた。

次の日は朝早く起きて電車に乗った。

上野郵便局が見えてきた。

上野は終点だった。